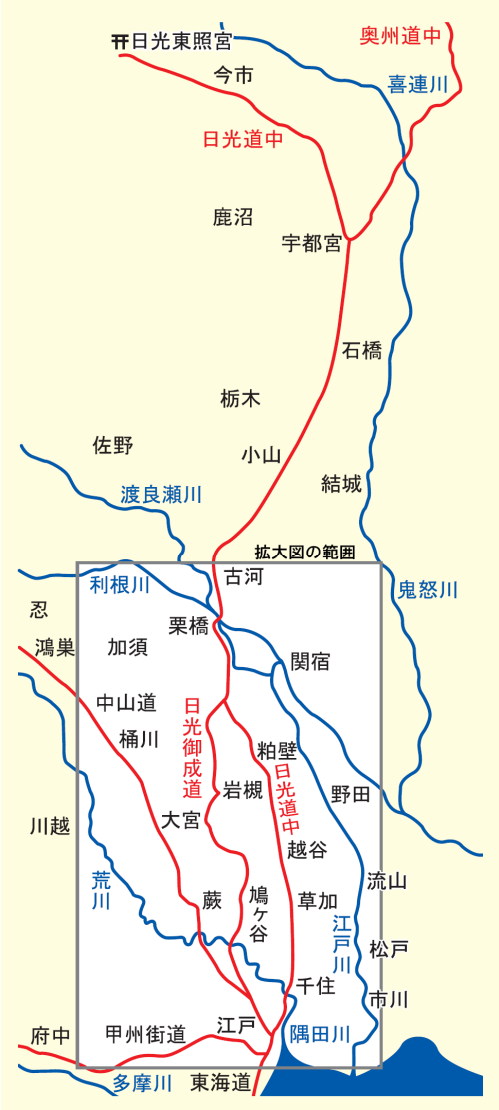
浦和博物館特別展 **日光御成道** 展示解説シート

平成 23 年 10 月 4 日～12 月 11 日



「日光御成道」は、江戸時代に幕府によって整備された街道のひとつで、「日光御成街道」などとも呼ばれています。道筋は、江戸の本郷追分で中山道と分かれ、岩淵宿、川口宿、鳩ヶ谷宿、大門宿、岩槻宿を通り、幸手宿の手前で日光道中に合流しています。岩槻を通ることから、江戸時代初期には「日光道中岩槻通り」「岩槻道」などと呼ばれていたようです。

この道筋は、おおよそ中世の鎌倉街道中道の道筋に沿っていると考えられています。鎌倉街道中道は、鎌倉と東北地方を内陸部経由で結んでいた中世の幹線で、奥州街道、奥大道などとも呼ばれていました。

江戸時代初期に、江戸と東北地方を結ぶ街道として整備された日光道中・奥州道中は、江戸の近くでは、千住で入間川（今の荒川）を渡り、草加、越谷、粕壁（今の春日部）を通る、鎌倉街道中道とは異なる道筋をとりました。参勤交代の諸大名や一般の旅行者はおもに日光道中を通り、もとの鎌倉街道中道の道筋は人通りもそれほど多くなかったようです。

この道が後に「日光御成道」と呼ばれるようになったのは、徳川家康が日光に祀られ、歴代の将軍が社参の際にこの道を使うようになったためです。社参は元和３年（1617）の二代将軍秀忠が最初です。このときは、将軍は越谷まで日光道中を通り、そこから岩槻を経由して幸手に向かっています。寛永17 年（1640）の三代将軍家光の社参のころからは、川口の錫杖寺で昼食を取り、鳩ヶ谷を経由して岩槻に向かうようになったようです。なお、鳩ヶ谷と岩槻の間の経路については、大門宿手前から貝殻坂を下り、釣上、笹久保を経て岩槻に向かう道が、初期の御成道であるという伝承があります。

この道が将軍の通り道に選ばれたのは、将軍が江戸を出て最初に宿泊する岩槻城への最短の道であること、人通りが少なく警備がしやすかったこと、社参には諸大名など大勢の供奉の者も同行したため、日光御成道のほか日光道中、中山道に分かれて通行し、通行路や宿泊場所が集中しないようにすること、などがあったようです。

日光御成道は、将軍が通行するため幕府の道中奉行の管轄となり、五街道と同様の管理を受けるようになりました。なお、「日光御成道」という呼び名が幕府の公式文書にみられるようになるのは、年代が下り、早くとも天明５年（1785）以降です。

将軍の日光社参

日光への社参は、徳川家康が日光に祀られた元和３年（1617）、二代将軍秀忠による社参に始まります。社参の目的は、家康の命日（めいにち）に合わせて日光で行われる例祭に参詣（さんけい）することです。例祭は毎年行われましたが、将軍が参詣するのは、年忌（ねんき）の節目や、後には幕府の威光を示す意図のあるときであり、平年は将軍の名代（みょうだい）が代参（だいさん）していました。

日光社参の供奉行列（部分）（天保 14 年（1843））
幸手市指定文化財「金子家文書」 原資料：個人蔵　写真提供：幸手市教育委員会
随行する大名の一覧や行列のようすなどをまとめた印刷物です。

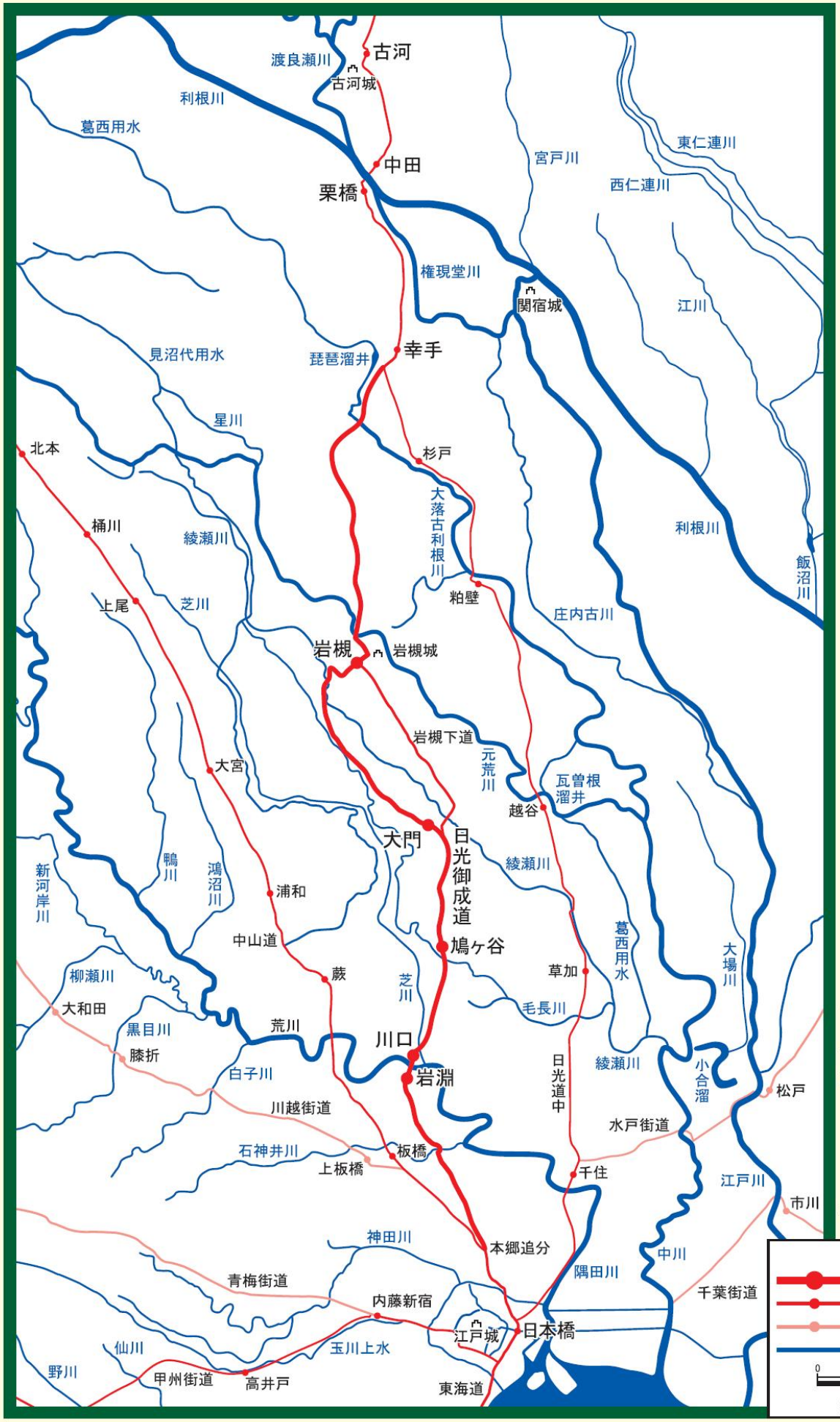
江戸時代初期、二代将軍秀忠や三代将軍家光の社参でも、数名の大名が同行し、供奉の者を従えた行列が組まれましたが、寛永 13 年（1636）に日光東照宮（にっこうとうしょうぐう）が完成し、荘厳（そうごん）な供養（くよう）が行われるようになると、社参の行列も規模が大きくなりました。同年の家光による社参には、多くの従者による大行列が組まれ、以降はこれが通例となりました。将軍家の威光を示すために行われたものですが、周辺の宿場や村々には、道の修理や掃除、沿道の家や畑の整備、藪（やぶ）の刈り取り、荷物の輸送や宿の準備など多くの仕事が命じられ、大変な負担となりました。また幕府にとっても多くの費用がかかる行事であり、次第に社参は難しくなっていきました。

幕府の財政悪化もあって、四代将軍家綱の代以降、社参の実施回数はぐっと少なくなり、間隔も長くなります。寛文３年（1663）の家綱の社参のあとは、享保 13 年（1728）の八代将軍吉宗、安永５年（1776）の十代将軍家治、天保 14 年（1843）の十二代将軍家慶と、およそ 200 年間に３回のみです。

回数が減った分、社参の特別性は高まり、実施にあたっては幕府の威光を示すため、周到な準備のもと大々的に行われました。享保 13 年の吉宗の社参の行列は、総勢 13 万 3000 人、人足 22 万 8306 人、馬 32 万 5900 疋を数えたと記録されています。

行列の規模が大きくなっても、街道の通行量や宿場に宿泊できる人数には限界があることから、行列の長さが長くなり、街道上では長い期間にわたって通行が続くという状況になりました。また、日光御成道だけではなく、平行する日光道中、中山道及び例弊史街道に通行を分散させています。これらは、周辺の宿場や村々の大きな負担によって支えられていました。

日光御成道の経路



【凡例】
- 日光御成道と宿場
- 五街道と宿場
- 主な街道と宿場
- 主な河川

0 5 km

※江戸時代後期の状況を示す

日光御成道・日光道中(埼玉県内)の宿場一覧

（天保 14 年（1843）調査「日光御成道宿村大概帳」「日光道中宿村大概帳」による）

宿場	宿高(石)	戸数(軒)	人口(人)	町並	本陣(軒)	脇本陣(軒)	旅籠(軒)	問屋場(ヶ所)	地子免	市立	宿人馬
岩淵	408	229	1251	3 町 31 間	1	1	3	1	なし	なし	川口と合宿
川口	668	295	1406	13 町 57 間	1	1	10	なし	1 万坪	なし	25 人 25 疋
鳩ヶ谷	406	217	906	4 町 20 間	1	1	16	1	8564 坪	3・8	25 人 25 疋
大門	1137	180	896	7 町 23 間	1	1	6	1	なし	なし	25 人 25 疋
岩槻	3172	778	3378	17 町 10 間	1	1	10	2	42145 坪	1・6	25 人 25 疋
草加	1679	723	3619	12 町	1	1	67	1	1 万坪	5・10	50 人 50 疋
越谷	1603	1005	4603	17 町 34 間	1	4	52	2	1 万坪	なし	50 人 50 疋
粕壁	1696	773	3701	10 町 25 間	1	1	45	1	1 万坪	4・9	50 人 50 疋
杉戸	1166	365	1613	8 町 20 間	1	2	46	1	1 万坪	5・10	25 人 25 疋
幸手	2095	962	3937	45 間	1	なし	27	1	1 万坪	2・7	25 人 25 疋
栗橋	689	404	1741	10 町 30 間	1	1	25	1	5000 坪	なし	25 人 25 疋

日光社参の行程

（天保 14 年（1843）４月　徳川家慶による社参（往路）、「徳川実紀」による）

４月 13 日	卯中刻（午前７時ごろ）　江戸城を出発 休憩　飛鳥山（東京都北区）、川口宿錫杖寺（昼食、川口市）、小淵村（鳩ヶ谷市）、 戸塚村延寿院（川口市）、辻村（緑区）、膝子村光徳寺（見沼区） 岩槻城（岩槻区）に宿泊
４月 14 日	休憩　慈恩寺村（岩槻区）、鹿室村宝国寺（岩槻区）、久米原村（宮代町）、 幸手宿聖福寺（昼食、幸手市）、関屋の岡（栗橋市） 古河城（古河市）に宿泊
４月 15 日	休憩　友沼村八幡宮（野木町）、千駄塚（小山市）、喜澤村（小山市）、 小金井宿慈眼寺（昼食、下野市）、薬師寺村（下野市）、石橋宿開運寺（下野市）、 北原新田（下野市）、江曽島（宇都宮市） 宇都宮城（宇都宮市）に宿泊
４月 16 日	休憩　戸祭村（宇都宮市）、徳次郎宿安養院（宇都宮市）、石那田（宇都宮市）、 大澤村龍蔵寺（昼食、日光市）、今市宿如来寺（日光市）、七里村人参畑（日光市） 日光東照宮本坊に宿泊

日付は旧暦です。このあと４月 17 日に神事をとり行い、４月 18 日朝に日光を出発、往路と同様の経路で４月 21 日夕方に江戸城に戻りました。

さぎやまの記并歌

安政２年(1855)

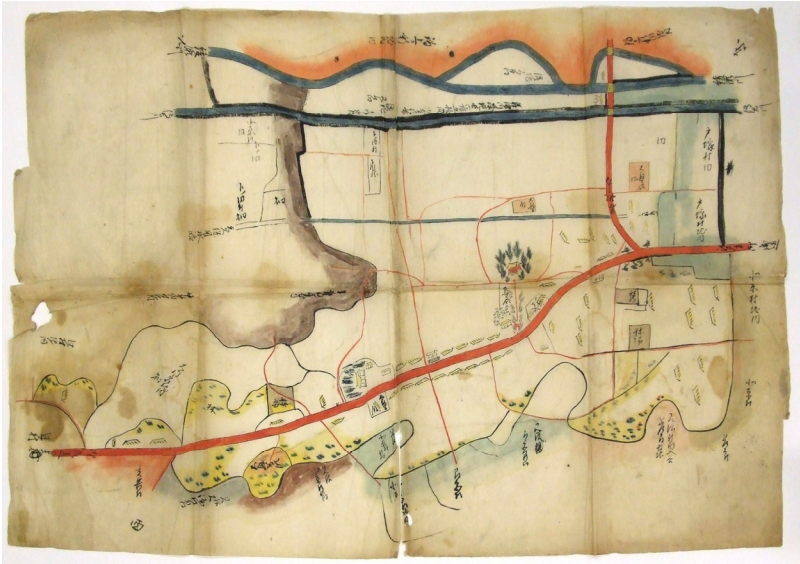
さいたま市指定文化財「会田家文書」

個人蔵　浦和博物館寄託

展示期間:11 月 8 日～12 月 11 日

宿場町大門

大門宿は、日光御成道の江戸から三番目（岩淵宿と川口宿は合宿として一つに数える）、江戸から６里19町（約26km）の場所にある宿場です。元々は鎌倉街道中道に沿ってできた集落と思われ、中世には市が開かれていたという記録があります。戦国時代の末には、人馬の継立など、宿場としての機能も担うようになっていたようです。



大門宿麁絵図

さいたま市指定文化財「会田家文書」（個人蔵）

埼玉県立文書館寄託（会田家文書 No.1921）

展示期間：10月４日～11月６日

正式に日光御成道の宿場となった時期ははっきりしていませんが、隣の鳩ヶ谷宿・岩槻宿までの公定運賃の記録が残っている寛文６年（1666）までには、公式な宿場となっていたようです。

野田のさぎ山

見沼田んぼができた享保年間（1716～1735）ごろから、日光御成道沿いの新染谷村（現さいたま市緑区大字下野田字宝永地区）の農家の竹やぶに、サギが集まって巣をかけるようになりました。当時、このあたりは紀伊徳川家の御鷹場に含まれており、鷹狩りの獲物となる野鳥を保護するため、鳥類の繁殖をさまたげることは固く禁止されていました。

さぎ山ができてから行われた将軍の日光社参は、安永５年（1776）と天保14年（1843）の２回です。将軍が日光御成道を通るときは、警備のため、沿道の林や藪は切り開き、見通しを良くすることになっていました。さぎ山も日光御成道に面していたため、本来ならば切り開く必要がありました。しかし、安永４年、翌年の社参に備えて沿道の調査が行われた際、保護の経緯を幕府に伝えたところ、さぎ山の伐採は行わず、かわりに畑の中を迂回する添え道をつくることになりました。さらに社参当日は将軍がさぎ山を「御上覧」し、「御称美」したと記録されています。

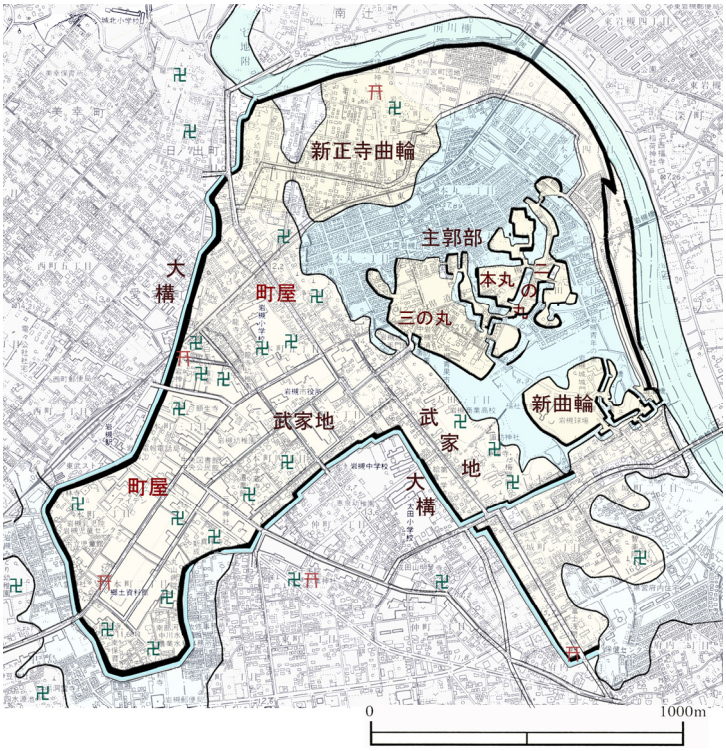
こうして、さぎ山の価値は将軍にも認められ、天明年間（1781～1789）には、さぎ山の周囲に、鷹場領主の紀伊徳川家から下げ渡された「御囲杭」が建てられました。さぎ山では、地主や村の負担で、サギが巣を掛けている間は一日中見張りをして密猟を防ぐこと、さぎ山の周囲には垣根をつくり、地主以外は立ち入らせないようにすること、垣根や杭が痛んだ場合はすぐに直すこと、などが命じられ、保護体制が整えられていきました。

このサギの集団営巣地は、その後寺山村（さいたま市緑区大字寺山）や代山村（同大字代山）、上野田村（同大字上野田）などに移り、そのたびに保護の範囲が広げられました。

城下町岩槻

岩槻（岩付とも書く）は、中世には武蔵国と下総国の国境地帯にあり、元荒川と綾瀬川（当時は荒川本流）にはさまれ、鎌倉街道中道が二つの川を渡る要衝の地でした。街道沿いには中世から久保宿、富士宿、渋江宿などの市場町ができていました。

岩槻城は、15 世紀末頃、岩槻が古河公方と扇谷上杉氏の対立の最前線となったころに築かれました。戦国時代の末には後北条氏の支城となり、城下町や武家屋敷を囲むように「大構」と呼ばれる土手がつくられました。



江戸時代の岩槻城と城下町

江戸時代には岩槻藩が置かれ、江戸の北方の守りとして、代々譜代大名の居城となりました。藩主の参勤交代には日光御成道が使われました。日光社参の際の将軍の宿泊には、江戸時代初期には、本丸にあった平屋建の御殿があてられました。この御殿は、享保 13 年（1728）の八代将軍吉宗の社参の前に火災で焼失したため、その後は二の丸に新築された御殿が使われるようになりました。

日光御成道と岩槻の商業

岩槻の城下町は、日光御成道や岩槻下道に沿って並んでおり、「岩槻九町」と呼ばれた９つの町に分かれていました。日光御成道の宿場でもあり、江戸からは４番目、８里 33 町（約 35km）の距離があります。問屋場は市宿町と久保宿町にそれぞれ一箇所あり、交代で業務を行いました。久保宿町の中ほど（現在の岩槻区役所付近）には一里塚がありました。

城下町では、地子免（土地にかかる年貢の免除）が認められるなど、商業の振興が図られました。毎月６回、１と６の付く日には、市宿町で六斎市が立ち、周辺で取れた米などの農産物、江戸などから運ばれた日用雑貨などが売買されました。中でも、岩槻木綿は特産物として広くその名を知られていました。近隣の農村でつくられた木綿は岩槻に集められ、日光御成道などの陸路や、綾瀬川・元荒川の舟運で江戸などへと出荷されました。

岩槻の伝統産業である人形づくりは、天保年間（1830～1843）ごろには行われていたようですが、いつごろから始まったのかははっきりとは分かっていません。伝承の一つとして、日光東照宮の建設に加わった職人が、その後岩槻に住み着いて技術を伝えたともいわれています。こうした伝承は、春日部の桐箪笥、越谷の人形など、日光道中沿いのいくつかの町でも語られています。

さいたま市立浦和博物館発行　〒336-0911　さいたま市緑区三室 2458 番地　平成 23 年 10 月 14 日